

死

動

发行人 金沢真宗学院  
代表者 高葉敬和  
金沢市安江町 15-52  
金沢教務所内  
電話 076-265-5191

第33号

## 「死について」・・・・・

金沢真宗学院 元指導 吉藤暢美

本年をもちまして十七年にわたり、お世話になりました。真宗学院指導を退任することとなりました。

退任にあたり『震動』へ一文を寄せよとのことで書かせていただきます。

さて、何について書こうかと思案いたしました。

本来であるなら十七年間の学院での思い出や出来事、他の指導の皆様、卒業生、在院生等との出会い想い等などを書けばいいかもと思いましたが、全く違うことがらを書かせていただきます。

それは昔から私の心のどこかに濁のように濁っている「死」についてです。

私が「死」について何気なく意識したのは幼稚園の頃でした。

「地獄」「極楽」などの言葉から「死」を漠然と意識したようになります。

死んだらどうなる?ほかの世界に生まれ変わるのか?誰もが小さい頃考えたであろうことが「死」についての想いででした。

皆様方にいまさら言うのも何ですが、生を受けた瞬間より「死」への道へと歩み出すのです。

生死は表裏一体、生老病死、四門出遊、佛法の要の一つです。

小林武彦著『生物はなぜ死ぬのか』(二〇二一・講談社)によれば三十五億年前に生命体が誕生し、長い歴史の中に遺伝子にプログラミングされているのが「死」であるとのことです。なぜプログラミングされたかというと生命体の使命である、種の保存と繁栄のためだと書かれています。なぜ「死」が種の保存と繁栄に繋がるかと疑問に思われる方もいるかと思います。

その理由について、遺伝子は時間の経過とともに徐々に劣化、そして傷つくため、そのような遺伝子が受け継がれることを防ぐために「死」というものをプログラミングしているからと説明されています。傷ついた遺伝子は種の絶滅に繋がります。

生を受けた時からその着地点?でもある「死」があるにもかかわらずどこか遠くにおいている私がいるのです。

すぐそこに「死」の足音が聞こえてるのかもしれないのに、その足音を聞こうとしない私がいます。

「死」は古来より忌み嫌われ、畏怖畏敬され、また敬われました。

中世の京の都においては火葬・土葬は貴族階級に限られたものであり、棺に納められ陵に入る天皇などは別格でした。

ごく普通の人々の亡骸は風葬で野ざらしであり、鳥獸に食われ骨となり土に還る身です。

京の都においては、三大葬送地、葬送地とは死体捨て場のこととて、都の郊外の山裾の、鳥辺野、蓮台野、化野に運ばれ打ち捨てられるだけでした。葬送地の手前には六道の辻(真宗の教義はおいておきま

して)があり、あの世とこの世の境界を示していました。

風向きにより物凄い腐臭が都に漂っていたと言われます。

そのようなことからも「死」はどこか遠ざけたいもので、嫌うもの避けていたいものでした。

「死に支度いたせいたせと桜かな」一茶

【散る桜残る桜も散る桜】 良寛

先人たちの中には「死」をしつかりと受け止め生き、「死」へと旅立たれた方もいらっしゃいます。良寛上人などは七転八倒の痛みにのたうちまわり「死」へと向かったそうです。医療の発展した現在では麻酔等で痛みからある程度逃れることができますが、昔は痛みをただ我慢するしかなく悲鳴も上げたことでしあう。「死」は痛みとともに恐怖を伴うのです。「死」というものは決して綺麗なものではありません。

「ホスピス」という言葉はご存じでしょう。末期ガン等の患者さんに肉体の治療とともに心の慰め・安心を与えることです。

『往生要集』には病人のそばで仲間たちが集まり花が咲き香った綺麗な極楽を心に想い描かせてています。

「あなただけが苦しみ死へと向かうのではなくここにいる皆も同じように苦しみ死へと向かうのですよ」と死に向かう者の孤独感を理解と連帯感によつて和らげているのでしょうか。

これは仏教流のホスピスといえるのではないでしようか。

また信仰を受け入れ、泰然自若の思いで「死」へと向かわれた方々もいます。

あるプロテスタントの方は、

「僕は洗礼を受けたからじたばなし、虚空を掴み死にたくない死にたくない、痛いのは嫌だ嫌だと言ひながら死ねるようになつたよ」

と言わされたそうです。神に身を任せ委ね、素直な身となれたのかもしれません。

クリスチヤン作家の遠藤周作氏は神と阿弥陀さんはよく似ているんじゃないかと言われています。何も答えてくれない、答えも出してくれない、ただ神に、阿弥陀さんに身を任せるだけなのではないかと言われています。しかしながらすべてを委ね、任せられる身になれない我が身があるのです。

「死」そのものの恐怖などは私にはありません。その前提としての痛み苦しみ、そしてすべてを引つさらっていく「死」への畏敬の念があります。

現在の真宗は「生きる」ことに重点を置き「死」に対するこだわり・想いが希薄ではないかと感じるときがあります。

「今を生きる」それも大切ですが、「いずれ死ぬ」も大切なではないでしあうか。

真宗ではよく「お迎えが来る」と言いますね。

ただ「死」を待つだけでいいのでしょうか。

先に書きました「死に支度いたせいたせと桜

かな」という一茶の句、その中の支度とは何でしょうか。

私には「法に触れなさい、聞きなさい」というのが支度ではないかと感じられます。

しかしながら、法に触れずにいる私、聞かずにはいる私がいます。

闇の中をふらふら歩く私がいるのです。

フランスのベルナノスという思想家であり宗教作家の方が言わられた言葉があります。私の好きな言葉であり、私にピタリと当てはまる言葉です。

「信仰とは九十九%の疑問疑惑と一%の希望があるのみ」と言われています。

私にはこの言葉が心に突き刺さる思いです。どこに答えがあるのか、どこに向いて歩めばいいのか、本当に闇の中をあてもなく歩く身なのです。

漆黒の闇、漆黒、真っ黒でありながら光沢を放つ、光を放つのです。

闇の中を歩むことそれが大切ではないでしょうか。

そこに一筋の光があるのかないのかではなく、歩み自体が大切であり求道なのでしょう。闇の中で迷い、引き返し、立ち止まり、何度も振り返り、光を求めながら「死」へと歩むのです。

残された時間はそんなに多くはないかも知れません、白駒の除(げき)を過ぐるが如しです。

# 一泊研修会



講師 ジェシー釈萌海

## 仏道は自分を抜きにして始まらない

—IOI四年度一泊研修会 講師

### ジェシー釈萌海

二月の金沢真宗学院の一泊研修会で学院生と出遇わせて頂き、何より貴重なひと時となりました。

以前から気になっていた問いの一つに「サンガとは何か」があります。そしてそのことを、私が学んだ学院では、残念ながらあまり感じる事ができず、孤独な期間を過ごしたことを覚えてます。それは勿論、私自身の問題もあつたと

思います。しかし、今回の研修で短期間でしたのが、金沢真宗学院生と一人一人と共通の課題を感じ、同じ仏道を歩む仲間として絆を感じることができ、心より感謝しています。これこそが「サンガ」だと、共に学び語り合いながら教えに

出遇つていく場である、と感じました。皆さんは間違なく恵まれています。問い合わせは、真の宗教に出遇うための入り口であつて、私たちを歩ませている促しでもあります。問い合わせが無ければ、歩みも始まらない。自分を抜きにして仏道はあり得ない、と思ひます。

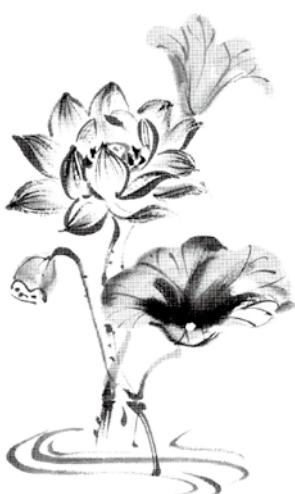
私の歩みは浅くて知識はありませんが、今までの歩みの中で、出遇つてきた人が善知識として導いてくださいました。Everyone can be a teacher to us if we only have the heart and mind to listen.

さて、その私の歩みを紹介させていただきますと、書物で勉強する事は勿論大切ですが、やはり限界があると感じています。また、日常生活の中の出遇いやぶつかり合いが、最も重要な私の促しとなっていると実感しています。「日本人ではないあなたは非常に難しい真宗を学ぶことに相当」苦労をされているのでは」と、学院生の一人から問われました。おそらく外国人だけではなく、日本人である真宗門徒も色々と苦労されているように感じています。聞法会では、講師になる人が伝えたいことと、門徒さんがついてこられるレベル、つまり理解できる話に、かなりの差があるように感じています。英語では「we want」と「they want」と表現できますが、住職や坊守としては、そこを意識する事も大切でしよう。「難しい話は要らない」と門徒さんからよく聞こえます。しかし、住職として教えを伝えていかなければならぬ、伝えていきたい、そのような義務感や気持ちがあるのは当

然です。難しい話をいかにわかりやすく伝えていくのか、と僧侶の私たちが問われているのではないか?と僧侶の私たちが問われているのではないでしょうか? 私も答えを持つていています。私は自身は学ぶプロセスとして、まず英語の本を読んで、後に日本語で同じテーマを読んでみます。英語は表現が婉曲ではなく、かなりストレートなどころがあるので、少し英語ができる人にもきっと分かりやすいと思います。真宗の本で英訳された本がいくつかありますので、日本語や英語のバージョン、両方を読めば面白いと思います。

個人的に特に課題となつている法藏菩薩の物語ですが、法藏魂、法藏精神、それについて書いてある曾我量深の、「Chijo no kyushu:Hozobosatsu shutsugen no rigi」、日本語では『精神界』の論文「地上の救主－法藏菩薩出現の意義－」が心に響きました。是非とも一読してみてください。

また、「有縁の法」という言葉を紹介したいと思ひます。「ただ仏法を学ぶという事であれば、



どんな教えだって学べる。学問の対象として学ぶ、行学とするときには、必ず有縁の法によれ」と、親鸞聖人は『教行信証』(一四六頁・私訳)に記されています。

「何故、真宗大谷派を選んだのか」とよく聞かれますが、私自身の選びではなかつたのは確かです。聞かれる度に、答えて戸惑つていきましたが、ある日「有縁の法」という言葉に出遇い、目から鱗が落ちました。「有縁の法」とは、自分自身にふさわしい法(道)ということです。自分の生きる道として仏教を学ぶということです。ただ知識として得ようとする学び方は、本当の学び方とは言えないのです。苦しみや悩み、悲しみや淋しさなどを抱えながら生きる人間に、その人生を力強く生きていける道を教えるのが仏教だと教わりました。自分の生きる道が明らかに



なっていくところにこそ、仏教の学びの大切な点があります。自分自身が苦しみや悲しみに直面したときに、それを問い合わせる力となるのは如来のはたらきそのものだと思います。

先ほどの、「何故、真宗大谷派を選んだのか」という問い合わせて、「自分の選びではありませんでした」と書きましたが、確かに導かれているように今は感じています。「道を本当に求めている」気持ちは、以前と全く変わっていないのですが、自分自身の情け無い姿を曝け出しながらでしか、歩みが始まらない事が明らかになりました。今になって「この道以外私には無い」との情けない自分の姿を受け容れながら、課題を持ちながら、新たな出発となりました。「私」ということが問題にならない限りは、人間にとつて出發は起こり得ないです。

そして、学びの浅い段階にも関わらず、高雲寺からの呼び声が私に届きました。「いつか質素な山寺の住職になれたらしいな」という念願は高雲寺との出遇いによって実現され、改めて不思議な力に導かれている自分であると、深く感動しました。あり得ないご縁をいただいているのは確かです。住職として歩みはじめて半年になりましたが、喜びも心配事も両方共に増えたと実感しています。しかし、もはや自分一人だけの歩みではなく、門徒さんと共に増えたりました。「ご院さん」と呼ばれる度に、不思議な仮縁に導かれて恵まれている自分であると感謝の気持ちが湧き上がります。

住職として高雲寺の先頭に立ち、ご院さんと



班別座談の様子

呼んでくださる門徒さんに育てて貰いながら、少しでも恩返しができるよう、ご院さんとしての役目を果たしたいと思います。眞実の教えとtogether、または、高雲寺門徒さんや地域の人々と一緒にしていきたいと考えています。

# キヤンパスレポート

三年生 聖川 つぼみ

私が真宗学院に入学を志したのは父の死後、教師資格を取って自坊を手伝わないといけないと思ったからでした。

その時は真宗を学びたいとか言う気持ちからはかけ離れたものだったと思います。

学院の入学式では誰が講師で誰が生徒なのか分からずに戸惑い、授業がスタートすると内容も良く分からず授業を受け、授業で出てくる言葉が段々積みあがっている感じ、分からないうのか分からぬような状態でした。そんな中、今回の地震で被災し私が住んでいる集落では甚大な被害がありました。

震災後はバタバタしたまま二年に進級し、夏には修練もありました。

私は修練がいい気分転換になるのではと思ひ、修練に入りましたが被災地から直接修練に入つたこともあり、そこは異世界のように感じました。

気持ちが切り替わらず、何を見ても被災した自坊の本堂や村の状態と比較し、納得できない感情が溢れてくる、口を開けば感情的な愚痴がでて来る状態でした。

本当の意味で修練に集中するのに二日～三日間と言う時間を費やしたのです。講師の先生が何度も繰り返し言っていた言葉が心に止まら

ず流れていきました。

しかし、ひとつでもその言葉の意味に納得出来たとき、自分の聴く耳や見る目が変わったような気がします。今思えば、修練での経験が私にとって大きな変化、「気づき」を頂きました。

今回、このキヤンパスレポートを書くことにとなり、真宗学院に入つてからどんな事があったのかを考え始めると自分の中に積み重なる変化を実感できる気がします。

本堂に当たり前にあった阿弥陀様が修復のために不在になつた際に漠然と感じた空虚感。

自分の中にそんな気持ちがあつたのかと驚き、それがひとつ気付いたのだと実感しました。

真宗学院での三年間とは大切な何かに気付くきっかけがあたわる場所なのだと言う事がよく分かりました。

「遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり」今がその時ではないかと素直に感じられます。

私にとって、学院での生活、経験はかけがえのない時間であり、学院で出会つた先生方や同士はかけがえのない存在と言えます。

真宗学院での生活は残りの一年間となります。が、新たな出会いや新たな気づきが、自分にもたらす変化を楽しみたいと思います。

三年生 架谷 紫音

真宗学院に入学して初めに印象に残つたのが、この学院は「自分について学ぶ場です」と言われたことです。自分についてすでに知つた気でいた私は、自分のことよりも、すぐに実践で生きる作法やお経について知りたいと思つていました。しかし、学院に通い、本山で得度式を受け、日々のお勤めに出させて頂くようになり、私は自分自身について全く知らずにいたことを痛感しました。特に大きなきっかけとなつたのが、身近だつた御門徒さんを亡くした時です。その時、初めて私はもつとその人を知り、自分を知つてもらつたからと後悔しました。人の死を受けてでしか自分の心と向き合うことができなかつた私はとても弱く、学院で言られた「自分を知る」ということの意味がその時少しだだけ理解できた気がしました。

私はまだまだ僧侶として足りない修行の身ですが、学院ではご本尊に向かい合い、自分自身と向き合うということを教えて頂きました。そ



これからは、自坊でも何か迷うことがあればご本尊に向かい合い、静かに手を合わせることが増え、阿弥陀如来が日々の生活に居てくださることに感謝できるようになりました。また、日々のお勤めの場でも、お参りをするだけでなく、ちゃんと御門徒さん一人ひとりとお話するということを大切に、寺という場を身近に感じてもらえるよう努められるようになったと思思います。

今のが学院生活を送ることができるのは、家族や御門徒さん、先生方、同じ生徒の皆さんが居てくださるおかげだと心から感じています。私に側にいてくれる人の大きさを教えてくださった皆さんは私の師です。これからも、かけがえのない学生生活を大切に、毎日を当たり前と思わず、日々感謝して学んでいきたいと思います。

二年生 宮岸 久美代

「遇うだけのことに遇うていかねばならない」

「何もかもあたわりや」・・・お念佛の盛んな村に生を受けた私は、明治生まれの年寄りたちから常にそんな言葉を聞かされて育ちました。運命を変えられず、諦めて日々を過ごし何事にも妥協せよという教えのように受け取り、若い頃は素直に聞くことができませんでした。長じて、世間の仕組みの中で、自分が正しいと思い込んでいる道を独りよがりに自己中心的に歩んできただのです。

還暦を過ぎてからご縁をいただき、真宗学院



の門を叩きました。聴講生として通ううち、それまでの自身の生き方、ものの見方に疑問を持つようになりました。深い見識を持たれた指導の先生方は少しも偉ぶらず、「一緒に学んでいきましょう」と朋として寄り添つてくださいました。手を合わせるもの、「あたわり」をは居心地の良さを感じました。在家の自分が寺族の方々と机を並べることに当初は遠慮のような気持ちがありましたが、学ぶうちその不安も吹き飛んでいきました。仏弟子として生きたい、まことを知りたいと思い、昨年本科に入れて頂いたのです。

ところがその頃、出産したばかりの長男の嫁が重い病に罹りました。長男宅と病院を往復し、

「悲しみは乗り越えるのではなく、深めるものである」という学院の講義で習った言葉を繰り返し呟くうち、ようやく、生かされている意味を確かめる日々にしたいと思えるようになりました。引き続き学院で学び、孫と共に手を合わせ、いつでもどこでも自分がいる場所、今のこの場所を『道場』としてお念佛申して生き抜く私でありたいと思っています。

二年生 富樫 駿

結婚した相手が寺の娘だったことが、私と仏教の関わりの始まりです。実家の宗教は沖縄伝統の先祖崇拜、進路はずっと理系で大学は工学部、就職はメーカーの技術職と、これまでの人生で真宗と関わる機会はほとんどありませんでした。そういうわけで、学院での学びとは、達成するべき数値目標やゴールもなく、何か利益を追求するためには物事を考えるでもなく、自分とは何か、人生とは何かを考えるもので今までやってきた勉強とは全く違うものだなと感じています。

これまでの安定していた人生のレールを外し

学院には遅刻気味になる日々。「何故我が家が、何故私が」と何度も思いました。学院の仲間からは常に励まされての一年でした。墓石効なく、嫁は一歳の子を遺してこの春お淨土に還つてしましました。手を合わせるもの、「あたわり」を引き受けられず心がちぎれ、他の何かのせいにしたい自己中心的なあさましい我が姿がそこにありました。

## しんどう

て、全く違う仏教の道を進むことについて、元のレールに対しても全く未練がないわけではなかったのですが、まあこれも何かの縁だろうと思いつき仕事を辞め学院への入学を決めました。ただ、そのようなフワリとした決心で仏道を歩むことを決めたので、入学した頃というのは入学理由を家族のため、寺を大切にしてくれてる門徒の皆様のため、という様に自分の外側においていたと思います。しかし、学院での授業や、子育てが本格化するなどのプライベートの変化、そして仕事を辞めたことによって以前よりも自分の過去を振り返り、人生について考える時間が増えたことによつて、今はまず自分のために真宗を学びたいと気持ちが変わりはじめました。自分とは何なのか、弥陀の光は本当に私に届いているのか。『真宗聖典』には阿弥陀様はすべての凡夫を救つてくださると書いてあるので、文字通り受け取ればもう救われているはずだけど、それをこの身で実感することは難しい。しかし、それで諦めたり中途半端な答えを出してそこに落ち着くのではなく、ずっと答えを探し続けていくのが大事なのかなと今は思つてます。

学院の環境は面白いもので、自分と同じように在家から真宗の道に入った人もいれば、坊守としてずっと寺に関わってる人もいて、年齢も立場も色々です。そういう人たちと一緒に勉強し意見を交わすことができるのも自分の勉強になると感じています。

## 真宗学院を卒業して

卒業生 越村 貴美

真宗学院に入学した頃の私は、常に先を読み計算通りに正しく進む方法を求めていたと思う。一寸先は闇なのにそのことに気付かずきつと何かがあるはず、という思いは消えなかつた。

真宗学院に入学したのも、もしかしたら探し物が見つかるかもしないという期待もあつた。

しかし二年生の前期の修練で、『答えなんてないよ』と言われ頭が真っ白になつた。それを探しにきたのに、そもそもないものを探していきたと知つたときのショックは、これからどう生きれば良いのかと不安に突き落とされたようだつた。あまりにも分からなすぎて何度も学院をやめたいくらいだった。そんなときに毎回のように学院の仲間が心配して話を聞いてくれた。そんな

ことが何度も続くとそのことに私は助けられてい、支えられていると強く感じた。私が自分でこれからどうしたら良いのかを求めようとしていたけれど、一人でどうにができるものではないと感じだした。自分が頑張れば何か掴んで

ると感じ出していた。答えのないことに真っ白になつてゐる私が支えられて生きられていました。何気なく、言われたからしてお念佛を中心とした場所であった。だから私が理解していくようとしていまいと、そこでの関わりは御本尊を中心とした関係であつたのだ。

三年生になると卒業論文を書く時期になる。そのとき私の卒論担当の指導の方から『あなたの立ち位置はどこですか』と聞かれ、外ばかりを見ていた私が初めて自分というものに目を向けることになつた。私の立ち位置とは母、妻いろいろあるが、私が立つてゐるのは今居ることではないか、つまり、今ここに私は居たんだと思つ



た。あまりにも分からなすぎて何度も学院をやめたいくらいだった。そんなときに毎回のように学院の仲間が心配して話を聞いてくれた。そんなことが何度も続くとそのことに私は助けられてい、支えられていると強く感じた。私が自分でこれからどうしたら良いのか求めようとしていたけれど、一人でどうにができるものではないと感じだした。自分が頑張れば何か掴んで生きていけると思っていていたことがそうではなくかったのだ。三年間学院に学びに来て、仲間との関係が一番私には大きなものとなつた。一人では何もできないんだと身をもつて感じた。しかしお念仏についてはいつこうに分からなかつた。でも私がここで感じた、周囲に支えられて私が存在できているという感覚は何か関係があ

た。それまで頭の中にいた私がそのとき血の通った生身の私として、現実の存在として現れ出てきた。そしてこれまでの人生でずっと探し始めたものは、生き方の正しい回答ではなく私自身であつたと初めて感じた。そのことに気付かされたとき私は自分の存在 자체がとても嬉しかった。今までそんなことを感じたことはなく、むしろなぜ生きていかなければいけないのか、生きることに何の意味もないのではないかと感じていた。それからは、視界が明るくなつたようを感じ、月や星の輝き、仲間、夫、子供、いろんな存在はすべて私のためにあつたのだと感じるようになつた。それぞれが勝手に単独で存在していると思っていたのにすべてが繋がつているように思えた。だからといって悩みや迷いが消えるわけではなく毎日のように襲つてくるのは変わらない。ただ私の立ち位置が、私が今ここに居ることであり、その私が周りの存在すべてに支えられていると感じられるようになつたことは、私の中で生きる意味を感じさせてくれるものとなつた。

真宗学院という学校に三年間通い、何かできるようになったのではないか、何かしなくてはいけないのでないかと焦りもあつた。そんなとき、同窓会の学年代代表になつたので、初めて同窓会の集まりに参加してみた。すると会長さんから、初めて来た私に『お念仏つて何かわかるか? 阿弥陀さんはどこにおるんや...』といろいろ質問攻めをされた。最初は学院に三年通つても何も答えられない自分が恥ずかしいと

思つていたが、だんだん何も分かつていい私があらわんだと、それでいいんだと、だからこれからも聞いていけるんだと嬉しくなつてきた。そしてそんな場がここにも私のためにあつたんだと思え有り難かつた。金沢真宗学院での三年間のご縁は私となつて今まで生きていたんだと思えた。そしてこれからのご縁は私をどこに連れて行つてくれるのだろうか、どんな気づきを与えてくれるのか、予測のできない世界を歩む勇気を真宗学院は教えてくれたと感じた。

### 卒業生 藤永 悟

顧みるに、私にとって学院は穏やかな日々のような場でした。真宗の教えをこの身にあびて自分を見つめ、問いを投げかけ、良い意味で懊惱しました。それを繰り返した日々は私にとって里程碑であり、得難いものでした。

入学前は闇の中にいたと言えましょう。己の未来像が見えず、自信を持てずにいました。今思えば浅はかですが、知識をつけることで解決を求めました。これは正解ですが最適解ではありませんでした。知識は大切です。ただそれらを物事に結びつける真宗の考え方や感性を優先的に磨くことが大切だと気付きました。そして現代社会で生きる人々が真宗に触れ、自身と向き合うことができれば良いと感じました。

現代は善悪などがはつきりとした二元的考え方を育てる環境です。もちろんこれは良いことです。「人知」による成長は社会で生きるには不可欠です。しかし、答えが明確であるが故に、自分



卒業式 勤行の様子

が正しいと思うことや見えることに執着して自身の毒を見つめることに背を向けようとしている気がします。入学前の私がまさにそうでした。対して、私が出遇った真宗では「分からない」が大いに認められていました。「分からない」が

## しんどう



良いのです。「分からぬい」からこそ問い合わせ続けることができるのですから。そして、真宗の教えを縁として、善惡を包括した自身を、道徳や倫理、常識に依らず見つめて問い合わせることに意味があると思います。答えが明確ではないので難しいですが、この継続の過程で積み重なっていくこそが「仏智」による成長なのだと気付きました。学院内は未来の縮図であり理想でした。

この考えに至る過程で、目標を同じくした学院生とは大いに語り合い、指導の方々には珠玉の言葉たちを頂きました。皆様尊敬すべき師で万謝の念に堪えません。金沢真宗学院でしか出遇えなかつたかもしれないと考えますと、斯様な縁を与えて下さつた阿弥陀様に念佛申しあげたい、そう思ひざるを得ないです。

## 金沢真宗学院特別講義開催報告

各分野で活躍されている先生方が、指導や学生に向け、専門的な知識を踏まえて丁寧にお話しされます。限られた文面では誤解や不都合を生じる講義内容のほんの一端を紹介させていただきます。限られた文面では誤解や不都合を生じる

講義内容のほんの一端を紹介させていただきます。

ことがあるかと存じますが、学院卒業生をはじめ、皆様方に少しでも教えに触れていただきく、このような形をもつて紹介させていただきます。

### 2024年度 金沢真宗学院特別講義一覧

No	期日	講師名	肩書・所属等	講題・内容
1	2024年6月21日(金)	相馬 豊	修練道場長	お寺に身をおいているとは どういふことですか
2	2024年7月17日(水)	坂谷 学称	本廟部堂衆	装束について
3	2024年9月17日(火)	青木 玲	九州大谷短期大学准教授	『教行信証』総序
4	2024年9月30日(月)	楠山 泰道	大明寺(日蓮宗)住職 日本脱カルト協会顧問	破壊カルトとマインドコントロール
5	2024年10月21日(月)	杉田 真衣	東京都立大学准教授	わたしたちの多様性ー「性」を中心に 念佛者として今の時代社会を生きるー「新しい戦前」をどう生きるか
6	2024年10月31日(木)	藤場 俊基	名古屋大学名誉教授	『教行信証』講義I
7	2024年12月4日(水)	平川 宗信	金沢教区常讃寺住職	『教行信証』講義II
8	2024年12月13日(金)	藤原 敬一	姫路第一病院小児科医	浄土の真宗は証道今盛りなり
9	2025年1月17日(金)			



## お寺に身をおいているとは どういうことですか

相馬 豊氏

真宗の教えを学ぶということは何かと言えば、真剣にこの身を生きる私が、すくわれたいのか、そうではないのかという問い合わせから講義は始まった。

近代の真宗学において、一つの大きな流れを作ってきたのが、同朋会運動である。講義では、一九五六年当時の宮谷法含総長の「宗門白書」の言葉より、「仏道を求める真剣さを失い、如來の教法を自他に明らかにする本務に、あまりにも怠慢である」と紹介し、聴講者に仏道を真剣に求めているのかを改めて問い合わせた。それは、自他ともにそれから湧きでて、「たすけてください!」という声が聞こえているのかどうかということだ。続けて、「寺に住む門徒なのかな」という言葉より、同朋会運動の願いの一つとして、僧侶自身が真宗門徒として立ち上がつてしまいということがあるのだとお話しされた。

まずは自分自身が教えを聞き、仏法に教えられる者、それこそが教師の姿勢であり、様々な問題をしつかりと確かめながら、同時にその問題に私をたずねていく。そして、「われもひとも生死はなれん」(『歎異抄』)と、人間であることの悲しみ、苦しみを縁(たより)として、はじめに合掌礼拝し尊敬から始まる生活を送る真宗門徒

として他者と出遇つていくことが願われているのだ。決して立派な人間になる学びではないのである。

そのうえで、いま「お寺」とはどんな場になつてゐるだろうか。そこで講師より問われた三つの問い合わせある。

- ①お寺は一体誰のものか。
- ②お寺は一体何を生みだす場なのか。
- ③あなたはお寺という建物を受け継ぐのか。

それとも教えを受け継ぐのか。

この問い合わせは、いまお寺に誰がいるのかを確かめ、この私が真宗の教えを聞く念佛者として誕生しているのかどうなかも暗に問うてある。この問い合わせは、本当に耳が痛い。教えを中心とした日常生活を送っているのかどうなかもストレートに聞いているからだ。しかし、だからこそ、私たちお寺に住む僧侶の日常生活のすがた(姿勢)こそが、教えの確かさを伝えていく要でもあるのだとお話しされた。わたしは、どこに立ち、どこに軸足を置いているのかが問われている。



## 装束について

坂谷 学称氏

大谷派の服装構成には八種類あり、それぞれの袈裟や衣など依用方法などを丁寧にお話いただき、またその袈裟や衣などの名称の由来などもお伝えいただきました。



特別講義の様子

## しんどう

ました。そして『大経下巻』にある「汝、起ちて更に衣服を整え、合掌恭敬して、無量寿仏を礼したてまつるべし。」(聖典八十五頁)を引用されました。仏さんの前でお参りするときは衣服を整える心構えが大事であるということを確認いたしました。また五条袈裟などを衣用するときは右肩を出していますがそれは『大経』にある「偏袒右肩」(聖典七頁)の姿であると述べられました。講義を受けて普段依用している袈裟や衣が経典に基づいていることを学ばせていただきました。



## 『教行信証』総序

青木 玲氏

一〇二三年の金沢教区御遠忌や金沢仏青主催の「聞」で使用されている親鸞図をご存じだろうか。そのデザインは九州大谷短期大学(以下、九短)からお借りしたものだ。この九短は学校全体を我が家のようにして過ごす学生の姿が印象に残る。親鸞の教えを背景に一つの大きな家族のようだった。そこは共に親鸞の教えを聞き、共に伝えていくことを大切にしている温かみを持った、親しみ深い場所のようを感じた。その大学で教鞭をとる青木氏。氏は九短での授業の出張講義のような思いで、学院生との時間を共に学んでいきたいとされた。

難思弘誓度難度海大船 無碍光明破無明闇

恵日。

難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。

『真宗聖典』一五九頁)

「難思の弘誓」とはひろく、ひろまる仏さまの願い。どんな人も分け隔てなく、どんな人も決してもらさない仏さまの願いがひろく、ひろまる。今の言葉で言えば「みんな」だと語る。仏さまの願いが「みんな」にひろく、ひろまる。その願いは渡ることが難しい海を渡す大きな船であると。「難度海を度する大船」しかここで問題となるのは、「みんな」とは何を指すのだろうかという点である。誰に誓われ、誰が渡り難い海に生きているのか。実は一番抜けているのが、この「わたし」という問題である。

「みんな」の中に「わたし」は入っていますか。

私たちは「わたし」中心でしか生きていけない。どんなに真剣で、どんなに純粹な願いも、わたしの欲からはじまる限り、次から次へと満足することができない。その繰り返しを迷いとさせた。外にばかり原因を見ているわたし。どこまでも当てにならないものを追いかけていたし。

一〇二四年九月三〇日に金沢真宗会館ホールで、日本脱カルト協会顧問であり日蓮宗の大明寺(横須賀市)のご住職でもある楠山泰道氏に「破壊カルトとマインドコントロール」という題でご講演いただいた。

楠山氏はまず、破壊カルトがどれだけ社会に悪影響を及ぼし、いかに危険なものなのかということをお話しされ、続いて宗教と暴力の関係についてもお話しされた。教祖や幹部たちが信者たちを支配するために暴力を用いる場合があり、その暴力を用いたことを正当化するために教義が用いられる場合があるということだった。

次に、オウム真理教を事例にして、優秀な若者たちがどうしてカルト教団に入信して犯罪

その「わたし」において、仏さまの「みんな」への願いが、他の誰でもない「わたし」に願われたものであつたという領きはどこに開かれるのか。それは念仏申す者と成つてはじめて氣付かされるものではないかと氏は語る。総序の冒頭の一文から、浄土真宗という仏道そのものが問われる「みんな」と「わたし」という課題を改めて知らされる機会となつた。

に手を染めることになったのか、オウム法廷において、マインドコントロール論が採用されたのかどうかについてお話しされた。残念ながらオウム法廷では、犯罪におけるマインドコントロールの影響についてはせいぜい「情状酌量の余地」程度にしか考慮されなかつたのである。日本におけるマインドコントロール論の専門家たちは、裁判にほとんど影響を与えることができなかつたその敗北感からか、その当時からこの三〇年間ほとんど理論的に深化させることはできなかつた。

その次にお話しされたのは、カルト教団が用いるマインドコントロールの手法や洗脳とマインドコントロールの違い、さらには勧誘方法についてである。カルトに入信しマインドコントロールにかかると、そこから抜け出すことは非常に困難である。また、某カルト教団は中・高校生をターゲットに勧誘活動をしているという。だから、世の中にはカルト教団といふものが存在することやそこに入信することがいかに危険であるかを、中学生ぐらいから知識として知つておくことがとても大事であることをお話しされた。日本では現在、義務教育の中で宗教についての授業がないため、カルト教団に入信することの危険性を伝えるような授業ができるない。そういう状況の中で私は、寺院の教化活動で、たとえば日曜学校や子供会などで、カルトの危険性を伝えられることができればいいのになあ、と思つた。

最後に、カルトから脱会した人たちの社会復帰についてお話しされた。カルト教団から脱会さえできればそれでいいという訳ではない。脱会しても深刻な後遺症があり、立ち直ることが容易ではない場合がある。脱会した人が社会に復帰するまで支援していく必要があるということを教えられた。



## わたしたちの多様性 —「性」を中心にして

杉田 真衣 氏

杉田先生をお招きするのは二回目となります。先生の研究活動は、フィールドワークを通して出会われた性的少数者、ホームレス、自身の努力からでは抜け出しがたい貧困状態にある方などの、いわゆるマイノリティと呼ばれる人々へ寄り添おうとする姿勢を強く受けとることができます。

講義の最後に「多様性を大切にすることは、すべての人たちが、いないことにされず、一人ぼつちにならず、ここにいてもいいと感じられる場をつくることではないか」と宿題をいただきました。

大変シンプルですが、それでいて大変難しい宿題です。生きているうちに、どれだけこの宿題を提出することができるだろうか。一人ではなく、どれだけの人と一緒に提出できるだろうかと。

今回の特別講義では、近年耳にする機会の多くなったダイバーシティ（多様性）という概念が日本でどのように受け止められているか伺う機会をいただきました。

多様性を認めるることは、誰もが生きやすい社会をつくるために必要な流れですが、企業内では「他者の尊重を謳いながら企業の競争力を高めて収益をもたらす生産性や効率性を重視しており、人権保障という観点は欠けている」（当日

資料より引用）状況にあることを知りました。

働いているのであれば、生産性や効率性を求めるのは当然のことのように思われますが、言い換えれば人間を評価対象としてのみ見ていいということでしょう。このようにダイバーシティという大切な概念すら、人間の都合のよいように理解され、また浸透している状況に危機を感じました。





## 『教行信証』講義 I・II

藤場 俊基 氏

昨年度に引き続き、藤場先生をお招きし『教行信証』の講義を2回開催した。講義では『真宗聖典』を引かれながら、その内容を丁寧に解説した。特に、「解脱」に関して、「煩惱」を消すのではなく、身を煩わすものが有りながらも、それに煩わされない身となることと押さえ、釈尊が解脱したことの意義を改めて学ばせていただいだ。そして、その釈尊の在り方に自身も成りたいた、共鳴した人々の歩みが仏教に学ぶものであるとの言葉が印象的だった。また、釈尊のようになりたい、釈尊のようにありたい、それを「成仏」と直接言わずに、念佛をして浄土に往生するという「往生」と一呼吸置いた表現にこそ真宗の特徴があるとのことであつた。

私も仏教の歴史の中に身を置くものとして、またその中でも「真宗」にご縁をいただいたものとして、今後の課題と指針を深める大切な講義であつた。

あらためて、今後も「教行信証」を自らの現実との関わりという観点から幾度も読み直していく。

本願とは、いのちの根源的要求、すべてのいのちと共に生きたいという願いである。したがつて本願に生きるということは、具体的には「無三悪趣の願」にある、地獄（戦争）・餓鬼（飢餓）・畜生（隸從・差別）の無い世界、そしてその願いの成就した「国富民安・兵戈無用」の世

## 念佛者として 今の時代社会を生きる



平川 宗信 氏

### 「新しい戦前」を どう生きるか

法学者の平川宗信氏に『念佛者として今の時代社会を生きる—「新しい戦前」をどう生きるか』という講題のもと、本願に生きる念佛者の生き方についてお話をいただいた。

若いころから人生の虚しさや寂しさに苦悩してきた平川氏は、生涯の師である和田稠先生との出遇いによってその後の生き方が大きく変わったという。和田先生から教えられたことは、「仏法を学ぶ」ということは理解することではなく、人生の方向を決定することではなく、「仏法を学ぶ」と「教えに生きる身となること」との間には大きな断絶がある。現代人は何でも頭で理解しようとするが、人間は身の存在である。念佛の教えをこの身に受け「本願に生きる」者となること、それが和田先生からの教えであった。



界を求めていく歩みである。私を生きるとは時代社会を生きることであり、この世界の深刻な社会問題・政治問題は私から離れたところにあるのではない。グローバル化した今の時代にあっては、私たちは世界の様々な課題とつながり、社会から影響を受け、また社会に影響を与える一人として存在している。だから共に生きることを願う本願の教えに生きることは、おのずと社会性・国家性をともなつてくるのである。

現在私たちを取り巻く環境は本願に背く状況に溢れている。ウクライナやガザの戦渦は治まる気配がなく、また米中の対立構造の中、アジアの軍事的緊張も高まっている。念佛者として「新しい戦前」と言われるこの時代をどう生きるのか。軍事力という鬼神を頼むのか、それとも本願を持むのか。平川氏からそのような問いかげをいただいた。

私はこの講義を通じて、自分自身の生き方を見直す機会を得た。これまでの自己中心的な生き方から脱却し、他人の命や社会の命に思いを向けることの大切さを再認識した。また、本願の精神である「慈悲心」や「忍辱心」をより深めることができた。この講義が私の人生に大きな影響を与えたことを心から感謝している。



## 浄土の真宗は 証道今盛りなり

梶原 敬一 氏

小児科医であり、真宗大谷派僧侶でもある梶原敬一先生に「浄土の真宗は証道今盛りなり」という講題でお話しいただいた。

はじめに、子どもの苦しみや問いは「人間とは何か」というところから生じており、大人はそれをごまかして生活している。しかし、私が私として生きていく理由、意味がわからなければ、死んでいくことも大変なことである。真宗の教えとは、生きる意味を教えることであるとはつきり示された。

お話をのなかでは、たくさんの問いかげがなされた。声明を通して何を伝えたいのか?そのことを意識しながらお勤めしているのか?念佛が聞こえない声明は誰にも届かない、という指摘は耳の痛いものであつた。それは、人間が念佛という問いかけでもあつた。

念佛は個人的な苦を救うのではなく、苦を抱えた人間を救う。人間が生きる世界を救う。時代を救う。「今」という時に念佛の教えを受けとめていくことは、過去をも受けとめ生きること。そして「人間」として育てられていく世界としての「浄土」を、静かな語りで教えていただいた。

## 卒業後の歩み

### 「同窓会の歩みの中で」

小山 健

金沢真宗学院を卒業されてからの聞法生活について、寄稿いただきました。

中村さん行動力のお陰だつたと思います。特に奉仕団での出会いによって北海道の別院等に研修旅行に行くことが出来たのは、中村さんの行動力のお陰だつたと思ひます。会報誌「さんが」にも中村さんに多く出筆していただき、篤信の姿がうかがえました。しかし、戦争経験による投稿もあり、当時「こんな戦時中の話ばかりで、読む人はどう思うのかな」と、自分も編集者として思つていてることがありました。

私が真宗学院を卒業してから、もう三十年近くになります。今日ではもう古株なのですが、よく顔を合わせる役員の方々は、何故か自分より年上の方ばかりでなにより人生の先輩としていつも刺数をいただいています。そして、同窓会において影響を受けた方として会長の存在は欠かせないものでした。

私が同窓会の幹事役員会に参加した当初の会長は森田喜一さんで、温厚かつ真摯な方だったと思います。当時の講演会などは社会的な関心が強かつた印象でした。

新興宗教団体の進出について危機感を抱かれていたことが思い出されます。今日、宗教二世問題を聴くと、自分が当時から無関心であったことが、同窓会の歩みであつたと思ひます。ひとえに人力、しかしながら、その時代を生きて問われてきたからこそ生まれた力であるようと思われます。

振り返ってみれば、課題に気づき課題を共にする場に同窓会があり続けることが望まれていると感じています。

次に会長になられた中村和雄さんは、私たちを引っ張つてくださった存在でした。

今も続けられている本山奉仕団参加や、学院卒業式とパーティへの参加は、同窓会員の繋がりを大切にされている姿勢からだつたと思わ

# 移動研修会＆一泊研修会 実施報告

## 移動研修会

テーマ 「私たち日本人の戦争と差別  
—「在日」の人々を通して」

行先 「京都朝鮮中高級学校・  
ウトロ平和祈念館」

期間 二〇二五年一月十一日(土)～十二日(日)

金沢真宗学院では毎年テーマを設定し、三学年合同で二つの研修会を行っています。一つは秋の移動研修会、近畿・東海圏へ赴き、旧跡を巡るなどのフィールドワークを中心とした内容です。もう一つは冬の一泊研修会、金沢別院・教務所を会場に学年混合座談を行い一年間の学びを深めます。

また、この課外授業は単に知識を深めることのみを目的とするではありません。

私たちがいたでいる教えは果たして、本当に親鸞聖人が見出された「浄土真宗」なのか、都合よく解釈し、伝えてはいないか。そのような問い合わせをもとに、「○○を学ぶ」ではなく「○○に学ぶ」、自らが念佛の教えと向き合う姿勢を顧みるという確かめを大切にしています。

そのため、テーマは真宗学・仏教学を中心としつつも広く非戦平和や差別問題などの社会問題も含め、三年間異なるものが設定されます。

二〇二四年度の実施は下記の通りです。



## 一泊研修会

テーマ 「今いのちがあなたを生きている  
—悲しみをご縁として出遇う世界—」

講師 (京都教区高雲寺住職、スイス出身)  
ジエシーア萌海氏

期間 二〇二五年二月一五日(土)  
～一六日(日)

本年は学院生・指導統計二六名の参加を得て、京都府へ赴いた。本来の九月の予定から台風による延期を経ての実施となつた。

また、本年は特に在日朝鮮人への差別をなぜ学院がテーマに設定するのか、という点をあらためて学院生に伝えるため、事前に在日朝鮮人差別を扱った映画「かば」の上映会を行い、川本貴弘監督によるお話、学院長講義を行つた。

初日はまず、京都朝鮮中高級学校へ伺い、教職員の方から、来歴や学校を取り巻く課題など現状をお話いただいた。クラブ活動など学生の様子も見学させていただいた。

二日目はウトロ地区、平和記念館に赴き、講和・フィールドワークを行つた。ウトロ地区は戦前、京都飛行場とそれに併設する飛行機工場の建設に従事した朝鮮半島出身の方々とその家族が多く住まわれた地であり、戦後、苛烈な在日朝鮮人差別の被害を受けてきた地でもある。

事前講義や研修会を通して、あらためて太平洋戦争、それに関わる教団の動き、そして在日朝鮮人差別の歴史・実情を学ぶことで、各々が大谷派教師資格取得を目指すにあたつてのこの問題の受け止めを考える大切な機会となつた。

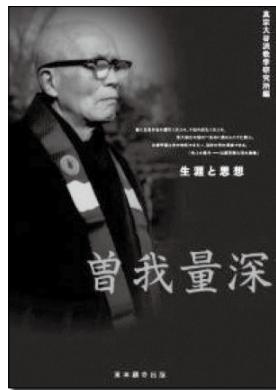
講義のあとは学年混合座談を行い、四班に分かれ、指導をファシリテーターとしながら、学院生が積極的に発言をした。初日の日程終了後は講師を囲んでの懇親会を行つた。短い期間ながらも先輩・後輩が一つのテーマについて語り合い、寝食を共にするこの一泊研修会は大切な学びの場であるとあらためて指導も含めた参加者が再確認する機会となつた。

## 本の紹介

### ①『曾我量深 生涯と思想』

真宗大谷派教学研究所・編

A5判・二八〇頁／一、九八〇円(税込)



親鸞の教えを  
独創的に考究し、  
教団内はもとよ  
り、西田幾多郎  
などの思想家に  
も影響を与えた  
近代真宗教学の  
巨人・曾我量深(一八七五～一九七一)。  
その生涯と思想を尋ねる一冊。

### ②煩惱百八面相

文庫判・一二〇頁／七七〇円(税込)

言葉としては  
よく知られてい  
るが、具体的な  
中身はあまり確  
認されない佛教  
語「煩惱」。

仏教学の研究  
者である著者が、仏教の「煩惱とは何か」を經典・  
注釈書にもとづき解説。  
苦惱の原因をより鮮明に知るためのガイド。



梶 哲也・著

### ③生も死も引き受けて —南無阿弥陀仏のいのちに生きる—

新書判・八〇頁／三三〇円(税込)

著者の父  
や師、郷里の  
念仏者との  
出会い、そし  
て妻の看病  
と別れの中

で交わされ  
た言葉をとおして、教えに生き、死を受け入れ  
ていくとはどういうことかを尋ねる。



著者・延塙知道氏

の皆様におかれましても、これまでと変わら  
ぬ姿勢でみ教えにこの身を照らしていく生活  
を続けていただき、また今後も法友として歩  
みを共にしていただければと思います。

平野 慶之

「震動」第三十三号をお届けいたします。編集にあたりこの一年を振り返って見ますと、京都への移動研修やジエシー釋萌海氏を講師にお招きした一泊研修、九回にわたって開催された特別講義など、実に多くの貴重な学びの機会をいただくことができました。また昨年度も多くの学院生がご卒業され、教師としての第一歩を歩み始めることとなりました。卒業された皆様方の、真摯に且つ謙虚に学ぶ姿勢は三年間を通して変わらず、その姿にこそ



からつて「これまで学院でいろんなことを学んできました。しかし私は聞いてもすぐ忘れてしまう筈のようなものです。だからこれからも仏法に身を浸していく生活をおくつていきたいと思います」、そんな言葉を残して真宗学院を卒業していかれた方がいました。学院の三年間は長いですが、過ぎてしまえばあつという間の三年間です。その限られた期間の中で、仏法を聴聞し続けていく生活を得たのであるならば、これに勝る利益はないかと思ひます。新たな日常がスタートした卒業生

## 編集後記